

第1回四国水問題研究会 議事概要（速報版）

日 時：平成18年6月30日 10:00～12:00

場 所：ホテルクレメント高松（香川県高松市）

出席委員：池田委員、井原委員、梅原委員、大年委員、近藤委員（会長）、鈴木委員、那須委員、端野委員、板東委員、廣田委員、福島委員、三井委員、望月委員（合計13名）

開会挨拶（四国地方整備局長）

- ・平成16年は6回の台風で四国各地に被害が発生、平成17年は記録的な大湯水の発生とともに、一転して台風14号による浸水被害が発生した。
- ・四国は、水が多すぎるか少なすぎるか両極端であり、治水・利水両方の安全度の向上が望まれる。また、近年の気象の傾向でも、雨が多い年と少ない年の変動が拡大している。
- ・「四国は一つ」に向けて水問題は避けられないテーマであり、運用開始30年を経た早明浦ダムの役割を評価するとともに、水源地へ感謝する気持ちを持って連携を深めていくことが大事である。
- ・河川管理者でできることには限界があり、産官学の大きな構えで、治水・利水ともに安全度を高められるような選択肢を模索していきたいので、ご議論のほどよろしく願います。

会長選出

- ・委員互選により、研究会会長に近藤四国経済連合会名誉会長を選出する。

意見交換

事務局より「吉野川水系に係る水問題の現状・課題」について説明した後、意見交換を実施した。（以下、主な意見等を記載。）

治水・利水・環境

計画を上回る洪水

- ・計画規模を超過する洪水の発生は、計画を策定した当時の水文データの統計期間の問題もあるのではないかと。

森林と流出

- ・洪水被害の多発の原因には、人工林の増加に伴う森林の荒廃も関係しているのではないかと。
- ・森林の手入れがなく枝葉が繁茂している状態であれば、むしろ洪水には葉面貯留や水分の蒸発散で有利となり、一方利水には降雨損失のため不利となる。
- ・森林流出については、地形や雨量強度等の関係も考慮する必要がある。

ダム有効利用

- ・ダム計画堆砂容量を上回る堆砂も大きな問題である。
ダム有効利用の観点から以下の質問が出される。
- ・ダム管理における降雨予測の精度はどの程度か？
降雨予測は数時間先の予測も正確に算出できないのが現状である。
- ・ダム管理における、いわゆる「ただし書操作」の実態は？
昔は操作規則重視であったが、最近は既存施設を極力有効活用す
観点から、操作を行っている。

水利用

- ・吉野川総合開発以前の水利用についても考慮する必要がある。
- ・水の余っている所と足りない所があり、ダムの利用方法の見直しも必要である。
- ・地下水（伏流水）も考慮する必要がある。
- ・農業用ダムや発電ダムも含めて論議するべきである。

上下流連携

- ・四国は一つ、水源地に感謝という考え方に共感。市民も行動する必要がある。
- ・水は市民生活の基本。実態を周知していくことが大事である。

社会状況を踏まえた治水対策

- ・越流しても壊れない堤防やコンパクトシティー（人口減少・高齢化に伴う住居の集中化）等の議論も重要である。

今後の研究会の進め方

研究会委員

- ・水問題の理解には全体的・総合的な議論が必要。法律の専門家や水資源問題の実務専門家にも参加してもらうことを提案する。
- ・森林と水は関係が深く、林野庁からも参加してもらってはどうか。

研究会の進め方

- ・治水と利水のバランスなど本来あるべき姿の研究が必要。まずは個別議論でなく全体的な議論が必要である。
- ・吉野川の治水・利水の歴史や経緯を取りまとめて、問題を共有化する必要がある。
- ・今後の研究会の進め方については、各委員の問題認識を共有化するため、各回毎に委員それぞれの専門部門の紹介をしてもらうことを提案する。

次回は、9月頃開催とし、那須委員、端野委員より研究発表をいただく。